

1. 略歴

| | |
|---------|--|
| 1987年3月 | 東京大学文学部英語英米文学専修課程卒業 |
| 1989年3月 | 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了 |
| 1993年9月 | マサチューセッツ工科大学大学院言語・哲学科博士課程修了 博士号 (Ph.D. in Linguistics) 取得 博士論文 AGR-Based Case Theory and Its Interaction with the A-bar System |
| 1994年4月 | 神田外語大学外国語学部英米語学科専任講師 |
| 1997年4月 | 同 大学院言語科学研究科助教授 |
| 1998年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 |
| 2016年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科教授 |

2. 主な研究活動

a 専門分野

英語学/理論言語学

b 研究課題

程度表現の構造と意味

c 概要と自己評価

2022年度は科研費基盤 (C) の課題「日英語の程度表現の微細構造および不定語のシステムとの関係」の3年目にあたる。前年度草稿をまとめた最小量表現に関する研究について、最小量述語が程度修飾語を伴わないで使われる時に主部名詞が指し示す個体が存在しないというニュアンスが生じうる原因の分析を改訂し、この形で出版された。ポイントは、最小量述語のスケールの上限がそもそも存在の否定を意味するという性質を活用するところであり、前年度執筆の草稿では、この最小量述語の特性が生かされていなかった。

数詞関連でも、前年度草稿をまとめた数詞形態についての研究から派生して、類別詞や「の」なしで直接数詞と組み合わせることができる名詞のタイプについてより幅の広い調査を行った。あらたに考察の対象に加えた事例は、形態的にはとりたてて見るべきところのないものであるが、考察対象が増えることにより、どういった名詞がそもそも数詞との直接的結合を許すのか、という問題自体が重要な理論的課題として浮かび上がる結果となった。それを受けて、2023年度は、まず、計量の単位としてはやや特殊な位置を占める集合名詞の統語特性を、擬似部分構造に焦点を絞って取り上げた。日本語においては、容器類をあらわす名詞が必ずしも数詞と直接結合しない形で擬似部分構造に生じうるのに対し、集合名詞は数詞との直接結合を擬似部分構造において要求することが判明し、日本英語学会の春季フォーラムの招待講演で発表した。そこでは、さらに、集合名詞が、日本語においても複数の個体を意味する名詞句とのみ結びつく点で英語と変わらないことを観察し、可算/非可算の区別の存在に関する議論にもつながるという問題の広がり指摘した。これらの成果は、限られたスペースではあるが、議事録用の短い英語論文にまとめた。

前段の成果は名詞の下位分類の問題がその大枠となる研究領域に属するが、形容詞の下位分類の問題も当然のことながら存在する。2022年度から、程度表現とどう関連するか探るべく、個人的味覚の述語と呼ばれる形容詞が英語でどのような特徴を示しているかを取り扱った研究をもとに、日本語についてもあらたな知見が得られないか模索してきた。2023年度はその努力が実を結び、WH疑問文への反応として主観的述語が客観的述語とは異なるディスコース上の位置を占めることを発見した。Lasersohn 2005の論文以来、個人的味覚の述語が無謬の見解不一致ともいえるべきものを容易に許すことが広く知られるようになってきているが、近年では、この性質が主観的述語一般にも当てはまることが認識され始めている。こうした知見に基づき、Kuroda 2005の論文において、日本語の助詞「は」が焦点解釈を受けると示していると主張しているデータのうち、主観的述語を用いている例文は、無謬の見解不一致の観点から再考察を要するという結論を得た。この成果は、年度をこえて2024年5月の日本英語学会春季フォーラムで発表した。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[分担執筆] *Polarity-Sensitive Expressions: Comparisons between Japanese and Other Languages*, Akira Watanabe, "Degree Quantification, Minimum Quantity Predicates, and Polarity in Japanese", De Gruyter Mouton, 単行本 (学術書), 2024, (pp.117-144 担当)

[分担執筆] *Handbook of Historical Japanese Linguistics*, Akira Watanabe, “Loss of Wh Movement”, De Gruyter Mouton, 単行本 (学術書)、2024、〈pp.341-364 担当〉

[分担執筆] 『分散形態論の新展開』、渡辺明、「数詞の形態」、開拓社、単行本 (学術書)、2023.12.8、〈pp.160-186 担当〉

(2) 論文

[国際会議プロシーディングス] Akira Watanabe, “Japanese Noun Classes and Numerals,” *JELS* 41: 285-289, 2024

(3) 講演・口頭発表等

[口頭発表 (招待・特別)] “Japanese Noun Classes and Numerals,” Akira Watanabe, The English Linguistic Society of Japan 16th International Spring Forum, 青山学院大学 (オンライン)、日本英語学会、2023.5.14

e その他

(1) 学術貢献活動

Journal of East Asian Linguistics (出版元 Springer)、編集委員、1996～

The Language Faculty and Beyond (John Benjamins)、advisory board member、2008～

Linguistic Inquiry (出版元 MIT Press)、編集委員、2012.8～

Acta Linguistica Academica、編集委員、2017.1～